



Title	岡奈津子さんを偲ぶ
Author(s)	タスタンベコワ, クアニシ
Citation	日本中央アジア学会報, 18, 38-41
Issue Date	2022-07-31
DOI	10.14943/jacas.18.38
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/91619
Type	article
File Information	JB18_004tastanbekova.pdf



[Instructions for use](#)

岡奈津子さんを偲ぶ

クアニシ・タスタンベコワ

2022年1月27日に独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所新領域研究センター・ガバナンス研究グループ長(主任研究員)の岡奈津子さんが急逝しました。私はこのことを知ったとき、とても信じられませんでした。何かの間違いだと思いました。なぜならば、岡さんからお正月に年賀状をもらったばかりで、そこには「また話そう」と書いてあったからです。これは、電話やメール、最近ではZoomで話したときに、岡さんが最後に必ず言ってくれていたことばです。私はいつでも岡さんと話せると思っていました。それができなくなったと思うと心が引き裂かれ、涙が止まりません。新型コロナウイルスの影響でお別れも告げることができなかつたので、ここで岡さんへの思いを伝えたいと思います。

私が日本に初めて来たのは2001年です。そのときは国費日本語・日本文化研修生(日研生)として筑波大学に1年間留学しました。当時、聴講していた「国際理解教育」という授業で、ソ連解体後に母国カザフスタンが独立国家となったこと、学校や生活で経験したことを話していた私に、授業を担当していた旧ソ連の教育制度・政策の研究者、嶺井明子先生が大学院への進学を勧めてくださいました。このアドバイスに従い、日研生を終えて帰国し大学を卒業してから、2004年に国費研究留学生として再び来日し、2005年に筑波大学大学院の教育基礎科学専攻に入学しました。岡さんとの出会いはこの時でした。でも、出会いといっても、まずは岡さんが書いた論文との出会いでした。当時、私はある種のアイデンティティ・クライシスを経験していました。カザフ人でありながら、カザフ語が自由に話せなかつた自分がいわゆる「半熟カザフ人 *шала казак*」ではないかと悩んでいました。いろいろ調べていくと、この「半熟カザフ人」という現象、概念はカザフスタンの独立後の民族・言語政策に関係があることが分かり、修士論文では言語教育政策における母語教育の保障をテーマにしました。そのとき、先行研究として読んだ論文の中に岡さんの「民族語の復興とそのジレンマ：国家語の制定をめぐる」(『アジア研ワールド・トレンド』第42号、1999年、19-20頁)があったのです。この論文は、多民族・多言語国家カザフスタンにおいて基幹民族であるカザフ人の民族意識が高揚している中で、カザフ語をこれまで強固な政治的、経済的、社会的地位を占め

ていたロシア語に代わる民族間共通語にすることの難しさを指摘していました。ロシア語、カザフ語、英語、日本語で読んだたくさんの方の先行研究の中でこの論文には大きな刺激を受けたことを今でも鮮明に覚えています。その後、ひたすら岡さんの論文を読み進め、自分の問題意識を磨いていきました。言語教育政策の複雑な背景を指摘することにおいて岡さんのこれらの論文は多に参考になりました。

修士論文を書いていたときから私は岡さんに会って、直接話をしたいと思っていました。2007年3月28～30日に行われた日本中央アジア学会第9回まつぎきワークショップに参加しました。ここで岡さんに会えるのではないかという思いがありましたが、あいにく岡さんは参加していませんでした。そのとき私は博士後期課程への進学が決まっていたが、家庭の事情で1年間休学をしました。2009年4月に復学してから思い切って岡さんにメールを送りました。岡さんからその日のうちに返信がありました。私は自分の研究テーマについて、博士論文の一環として帰還カザフ人(оралман、2021年から қандас)の子どもたちがロシア語ができないことで直面する問題について調査していることを書きました。すると、岡さんは自分の論文「祖国を目指して：在外カザフ人のカザフスタンへの移住」『移住と「帰郷」：離散民族と故地』調査研究報告書、アジア経済研究所、2008年)を送ってくれました。この論文を参考にしつつ、私はフィールド調査を進め、岡さんのアドバイスでその調査報告を『日本中央アジア学会報』第6号(2010年3月)に投稿しました。査読者はもちろん匿名でしたが、おそらく岡さんに査読してもらえたのではないかと思います。

以降、岡さんと頻繁にメールのやり取りをしていました。当時、私は博士課程を修了するために、生後6か月の長女をカザフスタンに置いて来ていて、とても寂しかったのです。愛娘から自らの意思で離れ、研究を続ける意義を見出せなくなったとき、ちょうど長男の出産を控えていた岡さんからはたくさん温かいことばをかけてもらって、心の支えになりました。また、カザフスタンの腐敗した政府とそれを許している人々への怒りと虚しさを長文のメールで岡さんに送ったときも、大変多忙にもかかわらず全部読んでくれて、丁寧に返信してくれました。岡さんは「その怒りを研究に昇華させて。きっと良い研究になるよ」と励ましてくれました。

岡さんが2011年にカザフスタンで日常的に行われている贈収賄のフィールド調査のためアルマトゥ市に約一年滞在していた頃、私はそのインタビュー調査の一部に協力しました。私はアルマトゥから60キロぐらい離れている町の出身ですが、そこに暮らす私の親戚一同は学校、病院、行政機関、警察などにおいて、まさに日常的に贈収賄を経験していたことを岡さんに話したら、インタビューを設定してもらえないかと依頼されました。もちろん、私は全面的に協力しました。これは自分が母国の発展に貢献する行動だと思いました。結果的に岡さんが出版した『〈賄賂〉のある暮らし：市場経済化後のカザフスタン』(白水社、2019年)

は大きな反響を呼び、国内外で高く評価されています。これに少しでも携わったことを誇りに思います。ここで、思い出すエピソードがあります。岡さんが私の親戚へのインタビューを終えて、アルマトゥに帰ろうとしていたときでした。私がバスターミナルまで見送ったとき、岡さんは、カザフスタンの贈収賄の問題を取り上げるのに、日本でも汚職があるのによくもほかの国のことを批判的に書けるね、と言われなかつたかといつも悩んでいると話してくれました。私はそのことばにとっても感銘を受けました。岡さんはただ研究関心があつてカザフスタンの問題を研究しているのではなく、少しでもよくなってほしいという誠実な願いがあるから研究していることが分かりました。今度は、私が岡さんを励ます番でした。賄賂の話をお岡さんのように真正面から取り上げることがとても大事で、カザフスタン国内の研究者には見えないことや批判するのに躊躇するところまで、一言も隠さずに書いてくれることがカザフスタンの人々のためになる、と熱く語る私に、「分かりました。クアニシがそういうなら、堂々と書きますね」と笑ってくれたことをいつまでも忘れません。

その後、私は2012年に博士号を無事に取得し、帰国して、就職活動をしてみましたが、どうやらカザフスタンでは自分の望むように自由に研究ができないことが分かり、翌年に家族4人で日本に戻って現職に就きました。岡さんにこのことを祝福してもらい、正しい決断だったと激励してもらいました。そして、相変わらず研究やプライベートの悩みをお岡さんに聞いてもらい、いつも鋭くかつ優しく的確なコメントやアドバイスをいただけてきました。もちろん、カザフスタンの政治・経済・社会のことについてもたくさん話し合いました。また、お岡さんのカザフスタンでのネットワークを活用して、私が必要としていた情報収集もできました。お岡さんでなければぜったいにできなかったことです。

2020年には新型コロナウイルスが猛威を振るい、自粛モードが日常化し、会いたい人には簡単に会えない日々が続く中、2回お岡さんとZoomで2時間以上話し合いました。なんの理由もなく、ただ今はなかなか会えないのでZoomでも話そうね、というお岡さんの何気ない声掛けでした。そのとき、お岡さんが体調を崩していたこともあり、私にはどうか健康だけは大事にしてね、となんでも注意してくれました。今、思い出すと心に刺されることばです。そこで、お岡さんの体調に配慮も忘れてまたこちらの悩みを相談しました。それは、私の日本中央アジア学会への入会です。上述したように、私は大学院生時代には本学会に入り、まっごきワークショップで発表して、また学会報にも投稿していますが、学位取得後帰国し、学会を離れてしまいました。就職後は専門分野の教育学関係の学会を中心に活動してきましたが、やはり中央アジアの教育はあまりにもマイナーな分野であり、こちらの問題意識を共有できる仲間になかなか出会えませんでした。孤独を感じながらやはり日本中央アジア学会に戻るべきかな、ただしばらく離れているから再入会することは大丈夫なのかなと悩んでいるとお岡さんに話したら、ぜひ入会するように勧められました。教育の専門家はいないかもしれ

ないが、やはり地域の特性を知り尽くしている会員ばかりなので、大いに刺激になるのではないかとまたも励まされました。そのことばを胸に本学会に入会し、昨年度は発表もできて、今後は自分が居場所にできる学会ができたことに心が落ち着いたのは岡さんのおかげです。

岡さんは一番初めのメールから私に自分を奈津子と呼んでほしいと書いてくれたので、私はずっと奈津子さんと呼んでいました。最後に奈津子さんに次のように言いたいです。

奈津子さん、いつも優しく見守っていただき、さりげなく背中を押していただき、本当にありがとうございました。奈津子さんは私にとって優しい先輩であり、厳しいメンターであり、良き友達でした。奈津子さんとお話ができなくなったことをまだ受け入れられない状況です。でも、今までかけていただいたことばを常に胸に秘め、奈津子さんの研究姿勢をお手本にし、前を向いて生きたいと思います。奈津子さんはどうか天国から見守ってくださいね。ご冥福をお祈りします。

(筑波大学人間系)